



Data 2022-46

監督: トマス・ウィンターベア

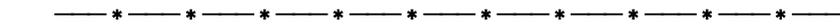
出演: マティアス・スーナールツ/
レア・セドゥ/マックス・フ
オン・シドー/コリン・ファ
ース/ペーター・シモニスチ
ェク/アウグスト・ディール

👁️👁️ みどころ

潜水艦モノは面白い！そんな私の持論は、「起承転結」の中でスリリングな展開が続くことで成り立っている。しかして、本作は？

いくら立派な潜水艦でも、整備が不十分だと魚雷の爆発事故が！本作ではそこからの救助が焦点だが、アレレ、アレレ・・・。

なぜ今、こんな“西欧側”による“ロシアもの”が公開？原題の『KURSK』が、なぜこんな邦題に？ロシアのウクライナ侵攻という現状に目を配りながら、本作の意義と問題提起を考えたい。



■□■潜水艦モノは面白い！本作も実話に基づく物語！■□■

潜水艦モノは面白い。それが私の持論だが、それは『U ボート 最後の決断』（03年）（『シネマ7』60頁）や『レッド・オクトーバーを追え！』（90年）、『ローレライ』（05年）（『シネマ7』51頁）等をはじめとする、さまざまな「潜水艦モノ」で実証されている。

『K-19』（02年）（『シネマ2』97頁）は、東西冷戦時代の1961年、ロシアの最新鋭潜水艦「K-19」の艦長役を演じたハリソン・フォードが、アメリカに向けてミサイルを発射するシーンから始まった。秒読みを終え、発射のボタンが押されたら、米ソは全面的な核戦争に突入！そう思っていると、実はこれは演習だった。そこで胸を撫で下ろしたが、実はその後ホントに原子炉に故障が発生するから、さあ、お立ち合い！原子炉の加熱が止められなければ、アメリカの海岸線付近で K-19 が大爆発！ミサイルも大爆発！そんな事態になれば・・・？

それに対して、『潜水艦クルスクの生存者たち』と題された本作は一体ナニ？本作もロシアの原子力潜水艦クルスクに起きた“ある実話”に基づいた映画だが、その実話とは？

■□■艦内で魚雷爆発事故が発生！！そりゃ一体なぜ？■□■

2022年4月14日、ロシアの黒海艦隊旗艦の巡洋艦「モスクワ」の沈没というニュースが世界中を駆け巡った。ロシア国防省は、「火災が起き、弾薬に引火して爆発が発生。修理のために曳航中に暴風に遭い、復原力を失って沈没した。」と発表したが、ウクライナ側は、「南部オデッサ近くの黒海海域で、同国軍の対艦巡航ミサイル『ネプチューン』2発が『モスクワ』に命中したと発表」。さて、真相は如何に？

それは、近い将来明白になるはずだが、2000年8月12日、大規模な演習に参加していたロシアの北方艦隊に属する原子力潜水艦「クルスク」が、艦内の魚雷爆発事故のために沈没したのは紛れもない事実だ。ちなみに、日本では去る3月10日に最新鋭潜水艦「たいげい」が防衛省に引き渡されたが、その基準排水量は約3,000トン、乗員約70名だ。それに対して、クルスクは基準排水量1万4,700トン、乗員は118名だから、その大きさは段違いだ。

しかし、1992年にソ連邦が崩壊した後のロシアの歩みは混迷を極め、1990年代は予算削減のため艦船の維持管理作業もほとんど行われなかったらしい。それでは、いくら図体がでかくても、いざという時に役に立たないのでは・・・？本作導入部では、乗組員への給料未払の実態まで明らかにされるが、そもそも、クルスク内で魚雷の爆発事故が起きたのは一体なぜ？それは、発射前に魚雷が高熱化している危険性が伝えられているにもかかわらず、放置されていたためだから、部品の劣化や整備不良はもとより、ロシア海軍の指揮命令系統のお粗末さはひどいものだ。

■□■なぜ今、本作が？区画によってかろうじて！■□■

本作には、クルスクの司令官なる主人公ミハイル役にマティアス・スーナールツが、ミハイルの妻ターニャ役にレア・セドウが起用されている。また、クルスクの救援活動に奔走する、英艦隊の准将デイビッド役としてコリン・ファースが登場する。『レッド・オクトーバーを追え！』では、ショーン・コネリーがロシア原潜の艦長として大活躍していたから、西欧側の俳優がロシア原潜の映画に出演しても不思議ではないが、なぜ今、そんなスタッフで本作のような映画が製作、公開されたの？

クルスク艦内で魚雷が大爆発したら、艦はたちまち大分解し、全員死亡。私はそう思ったが、ミハイルによる潜水艦内の各区画の封鎖命令によって艦尾へ避難したミハイル他23名の乗組員は、海底に沈んだまま何とか生き残ったらしい。しかし、残された酸素は少ないはず。彼らの救助の可否は時間との競争だが、演習中の事故だから、クルスクの周りにはロシア軍艦がいっぱい！ならば、直ちに救助の潜航艇を派遣すれば、乗組員の救助は可能はずだ。

■□■生存者の救助は？時間との闘いは如何に？■□■

本作のチラシに躍るキャッチコピーは、「残されたのは、わずかな酸素と希望だけ」。そんな中、クルスクの事故を知った家族たちが詳細な情報提供を求めたのは当然だが、大

規模演習が軍事機密なら、潜水艦の内部は機密だらけ。いくら英艦隊の准将デイビッドから「救援に行くよ」と言われても、すんなり「それでは、よろしくね」と言えないのは仕方ない。そんな場合のお役所の対応が白々しくなるのは日本でも西欧でも同じだが、本作では、ウラジーミル・ペトレンコ司令長官（マックス・フォン・シドー）をトップとするロシア海軍当局の官僚的対応が際立っているから、それに注目！ターニャたち乗組員の家族が怒り狂ったのは当然だが、そうかと言って何か手があるの？

そう思っていると、ロシア海軍の潜航艇による救援が到着したから、それに気づいたクルスク内の生存者たちは大喜び！大歓声を上げたが、肝心の潜航艇とクルスクとの接続は？それに手間取っていると、徐々に潜航艇のバッテリーが切れてきたため、ここはひとまず引き返さざるをえないことになったから、アレレ……。バッテリーの充電は？再救援は？後部の区画に残されたまま救援を待っている乗組員たちに残された酸素と希望はいつまで持続できるの？

■□■本作の起承転結は？VS日本海軍の悲劇■□■

潜水艦（艇）をめぐる日本海軍の悲劇は、1910年4月15日、佐久間勉艦長が指揮する第六潜水艇が山口県新湊沖で半潜航訓練中に沈没した事故。その原因は、①佐久間大尉の安全性を軽視した日頃の行動、②煙突の長さ以上の深度への潜航を命じたこと、とされているが、注目すべきは、殉職した乗組員はほぼ全員が自身の持ち場を離れずに死亡しており、持ち場以外にいた乗組員も潜水艇の修繕に全力を尽くしていたこと。国外（主に欧州）では同様の潜水艇事故の折、脱出しようとした乗組員が出入口に殺到し、最悪の場合は乗組員同士で互いに殺し合うなどの悲惨な事態が発生していたことに比べ、出入口へ殺到せずに最期まで潜水艇を修繕しようとしていた佐久間艦長および乗組員の姿は大きな感銘を与えたわけだ。これは潜水艦が本格的な戦力として使えるかどうかの黎明期の事故だが、そこでは艦内で殉職した上記の日本海軍軍人たちの死にザマの見事さが語り草になっている。

前述したように、なぜ今、クルスク沈没事件が西洋側の手で映画化されたのかはわからないが、「残されたのは、わずかな酸素と希望だけ」というキャッチコピーにもかかわらず、本作は「起承転結」に欠けているのが特徴。つまり、クルスク内で魚雷爆発事故が起こり、残された区画でミハイル以下23名が生き残っていたが、救助が間に合わず、結局全員死んでしまったというだけの物語になっているから、アレレ。潜水艦モノは面白いはずだが、その点をどう考えればいいのか？本作の原題は『KURSK』と単純（シンプル）だが、邦題は例によって（？）、『潜水艦クルスクの生存者たち』と説明調。なぜ、そんな邦題にしたのかを含めて、本作の意義と問題提起をしっかりと考えたい。

2022（令和4）年4月21日記